



こ	こ	に
生	き	る

働く盲人の記録

こ こ に
生 き る

働く盲人の記録

序にかえて

作家 田 中 澄 江

眼が不自由になったひとが、いかに、その困難な状況の中から立ち上り、困難を克服して、それぞれの道を切りひらいていったか。ここに集められたかたたちの話を読みおえて、大きな感動に胸を打たれた。

児玉聖子さんは、聖心インターナショナルスクールの図書館につとめ、カードのタイピング其の他の、むずかしい仕事に取り組んでいる。盲導犬をつれて山登りもする、周囲皆英語という職場での積極的な生き方にはなみなみなならぬ神経を使うことであろう。しかし、児玉さんは、着実に慎重に自分の体験を積みあげてゆく。

日本ライトハウス職業生活訓練センターの所長代理をつとめる日比野清さんの今日に至る道も鮮烈である。元気のよい、行動力のある少年は、十二歳で視力を失なう。あたたかい周囲の期待にこたえて少年は強じんな精神力を発揮、精神一到何事か成らざらんを motto に今日までの道を貫く。家族の少年に対する配慮の深さに、私自身も視力障害の息子

を持つので、しばし落涙した。

有本圭希さんが、全国ではじめての、大阪府立白菊高校の、全盲の英語教諭になるまでの努力も、ひたすらに「失望せず、あきらめず」の強い意志に支えられたものである。

実践女子の国文科を卒業した矢野圭子さんは、視力を失なって盲学校に進み、現在は大手の銀行でヘルスキーパーとして生甲斐ある暮しを持っている。つねに前進をつづける積極的な姿勢が美しい。

札幌市で中央鍼・マッサージ治療室を手びろく運営する藤本洋一さんの、今日に至る精神の軌跡も力づくよくれたのもしい。

「点字毎日」を編集する高橋実さんの少年の日の思い出も深い感動をよぶ。不可能のないあすにむかって、眼の不自由な少年は裸馬を走らせていた。

「東村山老人ホーム」職員の後藤桃子さんは母として妻として、苦労がたのしみだという果敢な姿勢をくずさないのが見ごとである。

電話の交換手をする平野登子さんも失明にくじけず、支援する周囲の熱意にこたえて、けわしい山坂の道を登りつつけて来た。しかも交換の仕事以外に他人のために役だちたいと願っている。

お琴の先生である中谷寿美子さんの小さい時からの体験も大いに考えさせられる話しだ

と思う。ここにはすぐれた教師と、その心をくみとるすぐれた生徒がいる。

玉田敬次さんは一ときは自殺したいとまで思いつめた悲しみから先輩の盲人にはげまれ、キリストへの信仰を深めることで救われる。ついには芦屋三条教会を創立しこの二十年の間、ひたすらにキリストの愛のあかしを告げるひとになる。苦しみや悲しみにであう度に、神も仏もないと嘆く日本の風土の中で、苦しみや悲しみこそ、本当の神とであう大事な機会であることを、自分の体験として語り、多くの苦しみや悲しむひとびとに勇気を与えるのである。

私はこれらの一つ一つの話しに、どんなに私自身が教えられ、私自身がはげまされたかを思った。これらのかたちたちを知ったことは、私だけのよろこびでなく、人生の苦しみや悲しみに直面する多くのひとびとに、光りとよろこびを与えるにちがいないと思った。是非一読再読することをおすすめしたいと思う。

目次

意欲に燃えて	1
若き三療経営者 藤本洋一さん	1
さわやかに応対十二年	27
電話交換手一筋の平野 登子さん	27
「不可能」をきりひらく点筆人生	47
障害を克服した『点毎』記者 高橋 実さん	47
母として、妻として、福祉指導員として	73
東村山老人ホーム職員の後藤 桃子さん	73
妻と信徒に支えられて	93
芦屋三条教会 玉田 敬次さん	93
心も体も健康に	115
銀行でヘルスキーパーとして働く矢野 圭子さん	115

「精神一到」明けゆく人生

後輩訓練生を導く日比野 清さん 135

英語にかける

聖心インターナショナルスクールの児玉 聖子さん 159

失望せず、あきらめず

念願の教壇に立つ有本 圭希さん 177

脱サラから施設づくりにかけた男のロマン

盲老人ホームひとみ園園長の茂木 幹央さん 199

強くてしなやか、クールで情熱的

箏アンサンブル・プリマルーチェの中谷 寿美子さん 219

コンピュータを仕事とし趣味として

千葉電子計算センターの石田 透さん 239

資料 わが国における視覚障害者の職業実態 259



意欲に燃えて

藤本洋一さん



意欲に燃えて

若き三療経営者 藤本 洋一さん

治療家として

「私は、はり・きゅう・マッサージ師の資格を持っています。この技術は、あくまでも医療の一端を担う者としての自覚に立って生かしていきたいと思っています。ですから治療家として患者さんの治療をすることを第一として、保健慰安的な面はできるだけ避けたいと考えました。そして第二には、私は全盲で全く見えない視覚障害者ですから、治療家として自立するために、まず仕事のしやすいように、働きやすい環境の中で十分な実力が発揮できるようにしたい」。この二つのことを常に考えて今日までやってきました。そのためにいろいろなことを考えました。ビルの中に治療室を作ったのもそうです。また営業面を考えて、技術者ばかりでなく営業マンも置いたりしてきました。この種の業界でも、営業マンを置いて積極的にセールスをすること、黙って待つのでなく積極的に呼び掛けて患者に来てもらうように働きかけることが大切だと思うのです」

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

ここに生きる

働く盲人の記録

昭和58年4月1日発行

定価 1000円

(送料 200円)

発行所 日本盲人福祉研究会

〒160 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 03 (200) 1130

振替口座 東京 6-16103

印刷所 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13

電話 03 (624) 6111

定価1000円

日本盲人福祉研究会